

都市と建築のブログ

魅力的な都市や建築の紹介とその3Dデジタルシティへの挑戦

Vol.53
丹後：龍

大阪大学大学院准教授 福田知弘

プロフィール 1971年兵庫県加古川市生まれ。大阪大学准教授、博士(工学)。環境設計情報学が専門。CAADRIA (Computer Aided Architectural Design Research In Asia) 国際学会 フェロー、日本建築学会 情報システム技術委員会 幹事、NPO法人もうひとつの旅クラブ 理事など。著書に、都市と建築のブログ 総覧(単著)、VRプレゼンテーションと新しい街づくり(共著)、夢のVR世紀(監修)など。ふくだぶろーぐは、<http://fukudablog.hatenablog.com/>



3 天橋立(飛龍観)

阿蘇海を切り取るように形成された、全長3.6km、幅20~170mの砂州で、白い砂浜と青い松原が美しい。天橋立の写真を見ると、誰もが一目で天橋立とわかる珍しい風景。小倉百人一首、雪舟「天橋立図」など、古来より和歌や絵画で表現されてきた。庭園造景のモチーフとしても参照されてきた。

天橋立を歩く

天橋立の楽しみ方は色々ある。高いところから眺める方法。飛龍観、昇龍観は、天橋立を南から北から縦方向に眺めた姿。一字観、雪舟観は東から西から横方向に眺めたもの。丹後国分寺跡からの眺めは天平観と呼ばれ、

阿蘇海と横一文字の天橋立を台地に吹き込む心地よい風と共に一望できる(図4)。

股のぞきをすれば、天橋立は龍となり、空を舞う。遊覧船から眺めていれば、カモメやトンビが大量にやってきてアングルの中に入ってくれる。撮影料は、カッパえびせん(図5)。

天橋立はなぜできたのか。「丹後風土記」によると、イザナギノミコトが天界と下界を結ぶために梯子を作って立てておいたが、イザナギが寝ている間に海上に倒れ、そのまま一本の細長い陸地になったそうである。他には、丹後半島から宮津湾に流れ出す河川から流出した砂礫(砂や小石のこと)が海流によって宮津方面(北から南)に流され、一方で、野田川から流れだす阿蘇海の海流とのぶつかり合いにより、ほぼ真すぐに砂礫が堆積したともいわれる。



5 かつぱえびせんキャッチできるか!?

はじめに 福田知弘氏による「都市と建築のブログ」の好評連載の第53回。毎回、福田氏がユーモアを交えて紹介する都市や建築。今回は丹後の3Dデジタルシティ・モデリングにフォーラムエイトVRサポートグループのスタッフがチャレンジします。どうぞお楽しみください。

リンクと共に焼餅やケーキが販売されていた(図1)。丹鉄コーヒーを注文して一番前の席へ。レストラン列車・くろまつ号が向かいに入線してきた。見知らぬ乗客から「この電車は指定席ですか?」と尋ねられる。鉄ちゃん間違われたのか。

列車はカタンコトンと進んでいく。なのに、大江山口内宮駅の手前、白い鳥居が見えるあたりで突然ストップして、優しい声の車掌さんが、元伊勢神社の解説をはじめた(図2)。列車が線路上で止まり、地域資源を解説してもらえること自体が新鮮だ。都心の環状線だっ

たら大渋滞だろうけど、体験してみたくもある。

元伊勢内宮 皇大神社は、「お伊勢参り」で有名な三重県の伊勢神宮より54年も前にまつられたといわれるため「元伊勢神社」と呼ばれる。正面に見えるピラミッド型の日室ヶ嶽は聖地とされる。

天橋立

天橋立は、古くから日本を代表する景勝地であり、松島、宮島と並ぶ、日本三景のひとつである(図3)。宮津湾と

丹後あおまつ号

大阪から列車で丹後へ向かう。山を越えるたびに天気は変わり、柏原を過ぎて黒井城のあたりでは虹に出会えた。丁度、カーブしながら移動する車窓からは、最初は虹の左側が、次第に、虹の右側が見えてきた。

福知山で京都丹後鉄道(丹鉄)に乗り換える。あおまつ号が待っていた。インダストリアルデザイナー・水戸岡鋭治氏のデザイン。車内カウンターでは、ド



1 旅の友
2 元伊勢神社の解説



4 天平観